

平成16年度大学入試センター試験前期日程における志願状況と科目別得点の特徴について

大津起夫ⁱ 橋本貴充ⁱ 荘島宏二郎ⁱ 石塚智一ⁱ

本研究は、センター試験の科目別得点と国公立大学における合否判定との関連の全体像を把握することを目的とする。

センター試験を選抜のための資料としている大学（より正確には学部、履修コースなどの募集単位）には様々な特徴を持つものがあり、合否判定がなされる基準も多様である。本研究では、受験者が出願している募集単位と、受験科目及び科目別の得点の関係に注目した。これらは出題科目の構成及びそれぞれの科目の試験の難易度の設定などを検討するために重要であり、センター試験の役割を検討する上で必須の情報であるが、最近ではこれらを概観しうる分析が見当たらない。このために、平成16年度の前期日程における受験者の志願と合否判定の状況を、研究開発部が保持する受験者の個人情報秘匿済みのデータに基づき検討した。

センター入試の前身である共通第1

次学力試験については、本研究と同様の関心に基づく分析がかなり詳細に行われている。研究の多くは共通第1次学力試験の発足間もないころに行われており、かなり込み入った手法を用いて分析が試みられている。分析の視点は本研究にも共通しているが、ここではより単純なデータ記述を用いることにより状況を概観する。論文中に示された得点と合否の関係の分析では比較的単純な分析手法しか用いていないが、分析の視点と結果の図的な表示方法を工夫することにより、直観的に明快な結果を得ることは可能である。本研究では、まず募集単位を志願者の得点における特徴によってタイプ（クラスター）別に分類し、次いでこれらの各クラスターにおいて、入学者及び不合格となった志願者の得点における特徴を比較することにより、センター試験が大学入試選抜において果たしている役割を明らかにした。また、募集単位のクラスターにおける科目選択率に

ⁱ 研究開発部試験作成支援研究部門（現 試験評価解析研究部門）

についても併せて検討した。

個別大学における成績と合否の関係においては、志願者がかなり均質な学力を持つ集団に制約されているため、センター試験の全体像を的確に把握することが難しい。本稿では個別大学における受験者の分析では発見が困難と思われるいくつかの傾向を指摘した。

共通第1次学力試験及びセンター試験の実施において重要なもう一つの課題は、選択科目間の難易度の比較である。いくつかの教科においては受験者による受験科目の選択が行われる。しかも少なからぬ募集単位において特定の教科科目の中からいくつかを背反的に選択して受験することが要求されて

きた。これらの募集単位の合否判定においては、互いに異なる受験科目を選択した受験者の得点が同一の基準において比較されることになるため、難易度の比較は公平性の確保からも重要な点である。現在ではこの問題に対応するため得点調整のルールが定められているが、これについては共通第1次学力試験の発足当初より注意が払われてきた。本論文では、この問題を欠測値に対応する非線形因子分析を用いて取り扱う。この方法を用いることにより、計算コストはかかるものの、科目の難易度の比較に、洗練された統一的分析のための理論的枠組みを与えることができた。